人工知能時代を＜善く生きる＞技術

堀内進之介　著

現代の先端技術であるインターネットを中心とする情報通信技術は，企業活動をはじめ私たちの生活に「なくてはならない技術」として，いつの間にか定着し，「身の回りにある，当たり前の技術」として子どもから老人まで誰もが使いこなしている。しかも，先進国のみではなく，むしろ開発途上国ほど積極的に取り込んでいる。もちろん，中身としての技術の仕組みや原理などは，多くの人が理解すること無く使っており，分からなくても十分に使いこなしているのが現状である。

このような「あたらしい技術」の代表であり，これから大いに期待されているものが「人工知能（AI）」である。AI を活用したロボット，VR，IoT，スマートスピーカー，自動運転…，これらのものが，このように普及するとは，10 年前は全く想像もされていなかった。一般市販品として，我々の生活（家）の中にあったり，町で見かけたりすることが「当たり前」になっている。このような便利で，快適な生活をもたらしてくれる一方で，社会や生活をこれまでにない「かたち」に変えていくことに対する不安も語られている。新しい学習指導要領の中にも，これからの社会を生き抜いていくための「あたらしい技術」への対応が含まれている。

著者は，政治社会学者であり，政治社会学・批判的社会理論が専門である。広く浸透しつつある AI に関して，漠然とした不安に対しての回答の一つとして，著者の独自の視点からアプローチしている。AI をはじめとする「あたらしい技術」は，人間が便利に使う「道具」ではなく，今やその中にどっぷりと浸かる「第二の自然」であると述べている。道具は，使うか，使わないかを人間が決めることができるが，あること自体が自然で，既にあるものとして私たちの生活に一体化している「あたらしい技術」の世界では，人間が従であると述べている。つまり，これからの社会では，道具であった「技術」が主体であり，私たち「人間」が客体になることが「あたらしい技術」である。

インターネット上によくある買い物サイトで，『あなたのために選んだおすすめ』などと表示されると，つい買ってしまうことがある。そんな心理とそう仕向けるシステムとしての「選好」（ある人が好んで選択するであろう可能性）がどうして成り立つのか。買い物履歴やポイントカードなどを通して，本人さえも気づかないうちに集められる膨大な個人データ，それを管理，分析することにより，個人の思考（嗜好）を先回りして「あなたのために」という善意に基づくサービスを成り立たせている。このようなサービスは，確かに，便利で快適であるが，そのようなことが「幸せ」であるのだろうかと疑問を呈している。

我々が便利で快適な生活を送るためには，AI に代表される常に進化し続ける「あたらしい技術」に対応する必要がある。技術の開発は，我々を便利で快適な生活を送れるよう，技術に依存する方向（当たり前，あることが自然な状態）に進展している。我々は「あたらしい技術」に対して「つながりっぱなし」の状態と常に「アップデート」する状態を維持していかなくてはならなくなっており，それに依存する傾向が高まっている。このような状態は，大きな負担もかかる。このような中，「善く生きる」とは，「あたらしい技術」に対して，「脅威論」と「待望論」ではなく，技術との「協働論」をどう描くか，技術をどのように利活用するか，人間としての我々の選択となると述べている。

（集英社新書，205 頁，720 円＋税）　（池守　滋）